

# 馬塚「古墳」調査報告

—三菱金属岡山アルミ缶工場建設に伴う—

1974.10

瀬戸町教育委員会

誤

正

回次

図版2(1)T-3断面図(東から)→..(南から)

P. 11, 12

縮尺 0 5m

→ 0 2.5m

図版第2

(1)T-3断面(東から)

→..(南から)

P. 14第5図

縮尺 0 10m

→ 0 10cm

# 馬塚「古墳」調査報告

—三菱金属岡山アルミ缶工場建設に伴う—

1974.10

瀬戸町教育委員会

## 序

瀬戸町の東側を清く静かに南へ流れる吉井川の水を求めて、キリンビールの大工場が35万m<sup>2</sup>の岡山県万富内陸工業団地に建設され、操業を開始したのは昭和47年5月のことでした。同工場がさらに缶ビールの生産をも企図するにあたり、三菱金属株式会社は、静岡県にある同社工場からアルミ缶を輸送する不便を解消するため、このたびキリンビール工場の西方に用地を入手し、岡山アルミ缶工場を建設することになりました。

この敷地内には、岡山県遺跡地図に登録されている馬塚古墳が所在していて、低く盛り上がった桃畠になっていました。南東の片山や西の新田山にも古墳がありますが、もとより上記のような開発から埋蔵文化財を守り保存することは、祖先からの文化遺産を受け継いで今日ある私たちにとり、重要な責務であります。

つきましては昨年10月、分布調査を実施するとともに、馬塚の取扱いについて、岡山県教育庁文化課はじめ関係機関や会社とも種々協議を重ね、本年8月、発掘調査を実施することになったのであります。

ここに調査を終了し、その概要をとりまとめて公けにすることになりましたが、指導助言をいただきました県文化課文化財二係の担当職員の方々、分布調査および発掘調査を担当くださった土井・角田両先生はじめ調査委員会の方々、調査実施にご理解ご尽力をいただいた地元各位に、厚く御礼申し上げて序といたします。

1974年10月

瀬戸町教育委員会教育長 小倉 寿太

## 例　　言

1. この報告は、三菱金属株式会社岡山アルミ缶工場建設に伴い、瀬戸町教育委員会の組織した馬塚古墳発掘調査委員会が、1974年8月20日から23日まで実施した発掘調査の概要である。
2. 発掘調査は、角田茂、土井秋夫が現場を担当し福田正継がこれに参加、県教育庁文化課葛原克人、枝川陽両主事の協力を受け、調査補助員として地元民若干名が加わり実施した。
3. 地形・トレンチ・採集遺物等の実測・製図は上記の者のなかから、それぞれ分担して当たった。
4. 報告書の執筆および編集・校正は、主として角田・土井・三宅が担当した。
5. 本書の挿図に用いた高さの数値は海拔絶対高である。

# 目 次

## 序

## 例 言

	ページ
I 調査の経緯	1
1 馬塚について	1
2 調査の発端	2
3 調査経過	5
II 地理的歴史的環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	7
III 調査の概要	9
1 トレンチ	9
2 トレンチ内の遺物	9
3 馬塚周辺採集の遺物	13
IV まとめにかえて	13

## 図版目次

図版 1 (1) 馬塚遠景（北から）	(2) 馬塚遠景（南西から）
図版 2 (1) T-3断面図（東から）	(2) T-2断面図（東から）
図版 3 (1) トレンチ出土遺物	(2) 周辺採集遺物
図版 4 (1) 五反田廃寺出土軒平瓦	(2) 妙興廃寺出土瓦

## 挿図目次

	ページ
第1図 馬塚周辺の地形および原始・古代遺跡分布図	8
第2図 馬塚の地形とトレンチ配置	10
第3図 トレンチ土層断面図（その1）	11
第4図 トレンチ土層断面図（その2）	12
第5図 馬塚周辺およびトレンチ内採集の遺物	14
第6図 周辺寺院跡出土瓦拓影	15
第7図 馬塚周辺の地割図	16

# I 調査の経緯

## 1 馬塚について

馬塚は、昭和42年文化財保護委員会（注・現文化庁）発行の「全国遺跡地図—岡山県」に、No. 966古墳（円墳）とされ、名称は記載されず、瀬戸町宗堂・馬塚に所在する遺跡として登録されている。

昭和46年12月から47年3月にかけて発掘調査された片山遺跡群が立地する、片山の北西麓に、四隅より一段高く盛り上がった約6アールの桃畠となっている、大字南方1,301番地の小丘が馬塚である。片山から南西へ下降する尾根が、鞍部を経て再び高まりつつ北々西に折れ、やがて徐々に下降し水田面に落ちる新田山（坊主山とも）との間に、馬塚池を奥に抱く小さな谷をひかえている。馬塚の西に接する大字宗堂275番地の水田部分には、かつて馬塚と一体となって平面ほぼ円形をなす高まりがあったが、削平されて水田になったと元地権者はいう。古老の談によれば、馬塚が表土浅くきわめて固いので、削平した西隣りの土を客土に用いて桃を植栽したそうである。

「改修 赤磐郡誌（昭15）」のなかで荒木誠一は、馬塚を円墳の項に挙げ、「草書より来る高塚の読み誤りか」とその所考を記し、また、地名に就いての項で「……宗堂と南方の塚に、昔馬塚と呼ぶ小丘が在った。今宗堂の分は均らして田となり、南方に属する丘の一部は畠となって、半月形に残って居る。（南北9米。東西最長15米。周囲の高0.9米。明治初年此處に南方小学を建てた）」と述べている。同郡誌の母体となった「太田吉岡村誌（大正13）」のなかでも荒木は同様の記述をしているが、寸法は「南北十間。東西最長九間三尺。周囲の高三尺」といく違うのみならず、調査団の計測値である南北長約40m、東西長約20m、隣接水田面からの比高約1.5mと比べるとどちらも近似しない。

ところで、この小丘上には荒木の記すように、かつて小学校が所在した。この南方小学が馬塚上にあった時期は、明治5年8月3日の学制制定により生まれた、坂根・南方・宗堂・塩納各小学を統合して南方小学をこの地に建設した明治7年から、明治19年に現在の千種小学校に移るまでの、わずか12年間ほどのことであるが、275番の田の削平が同小学創設以前ではなかろうかと思えるのは、明治20年作成の土地切図によると、すでに馬塚は半月形の畠に変貌し、西接する275番地は田となっているからである。

こうして文献・伝承等を考慮しつつ現状を見ると、現在の桃畠全体は盛土をしたといわれるにむかわらず、その径に対する高さの比率が異常に低いだけでなく、平面形もまたあまりにもいびつで正円弧をなさない。外見上からは古墳と推定することはきわめて困難である。確実に古墳と断定できる遺構・遺物も表面観察からは不明で、わずかに耕土上に散布するのは、新しい時代の瓦片・陶片等であって、古墳時代の指標となる土師器または須恵器は1片も採集できなかった。

以上の状況から「古墳」と速断することは困難であるが、先学の指摘どおり古墳であるかどうか、トレーニング調査その他の方法によって、土壤構造のあり方を観察する必要を感じる。現在の外見上古墳と認めがたくとも、かって馬塚上に何基かの小古墳が載っていたような事実がつかめるかもしれないからである。

(文責・角田)

## 2 調査の発端

昭和47年11月ごろより、東京都千代田区大手町1-5-2に本社をおく三菱金属株式会社が、万富駅の南に広大な敷地を占めるキリンビール岡山工場と、その西方新田山との間114,195m<sup>2</sup>（約3.46万坪）を造成して、同社岡山アルミ缶工場を建設したいむね、瀬戸町と交渉が始まり、町としても積極的にこれを誘致することになった。

瀬戸町教育委員会は町企画課に対し、同工場予定地内に馬塚「古墳」の存在することを連絡して善処を要請するとともに、会社側とも協議を重ねた。会社側に対しては、文化財保護の趣旨と内容を伝えて理解を求め、会社からは、法の規定にもとづく発掘調査実施の要請を受けた。昭和48年にはいってからも、調査実施への交渉は難航を続けたが、以下の経緯をたどってみる。

48. 6. 10 会社が用地買収開始。町教委は同社岡山アルミ缶工場建設事務所福本次長より設計書の説明聴取。
8. 15 馬塚が未買収のため、発掘調査実施と出土遺物の帰属等につき、南方区長より承諾書受理。
8. 25 馬塚の現状視察（角田・三宅・山本）。
8. 27 三菱金属より発掘調査に関する確約書を受理（取締役社長 稲井好廣名・社印・職印による町教委宛のもの）。

## 確 約 書

馬塚古墳群発掘調査実施にあたり、次の通り確約をします。

1. 調査期限及び所要経費についてはいっさい制約いたしません。
2. 発掘調査及び調査報告書作成等に要する経費は、当社が負担いたします。
3. 出土遺物については、いっさいの権利を放棄し、瀬戸町教育委員会へ委譲します。
4. 調査については、保存を含めて協議検討し、瀬戸町教育委員会の指示に従います。

以 上

9. 4 県文化課岡本係長より、発掘調査員としては角田・土井両名に依頼するよう指示され、角田より「県遺跡保護調査団の了解をとることが必要」と回答される。
10. 4 町教委より、角田・土井両名に対し、馬塚の分布調査を依頼。
10. 6 分布調査ならびに略測。
10. 12 分布調査報告『瀬戸町馬塚「古墳』について（角田・土井）』が提出される。
10. 16 分布調査報告書を県文化課と県遺跡保護調査団へ送付。
49. 1. 23 三菱金属が町経由にて開発行為許可申請書を県へ提出。
3. 5 県より開発行為許可書送付される。
5. 21 三宅、県へ出向し協議。文化課より、瀬戸町の文化財保護に対する姿勢と施策の不充分さを指摘され、馬塚問題に関する文化課の協力方はほとんど困難であると思われた。
6. 4 三宅、県へ出向、今後の町の文化財保護行政の決意を説明。西口課長補佐より、去る6月1日の、文化課と県遺跡保護調査団との定例協議会の模様を聴取。それによると、席上角田より馬塚の概要説明があり、文化課としてトレンチによる確認調査を提案したところ、了承をえたとのことであった。』

その後も、現実的調査態勢や調査結果処理の問題で若干のくい違いがあり、種々折衝を重ねる。基本として、遺跡の有無を確認するためトレンチ調査を行ない、なんらかの遺構発見の場合は改めて協議することに合意。

7. 20 発掘届を県へ送付。
8. 15 角田・土井・福田と県文化課、町教委三者で協議、トレンチ調査の内諾をえる。
8. 17 三菱側と角田・土井・福田および町教委の最終協議。中途新発見の場合や、重要遺構検出の場合の会社側の態度を「確約書」にもとづいて再確認し具体的調査日程と方法を決定。同日南方区長に対し作業員8~10名の確保を依頼。
8. 18 馬塚古墳発掘調査委員会を正式に結成。その構成は下表のとおり。

氏 名	役 職
委員長 小倉 寿太	瀬戸町教育長
委 員 角田 茂	瀬戸中学校教諭
・ 土井 秋夫	無職
・ 福田 正繼	無職
・ 日下部 茂登志	町文化財保護委員長
・ 佐近 弘	町教委教育課長
幹 事 三宅 康文	町教委庶務係長
監 事 藤野 秋光	町企画課長
指導機関	岡山県教育庁文化課

(文責・三宅)

### 3 調査経過

49. 8. 20 すでに「馬塚について」の項で記したような半月形の地形にかんがみ、ほぼ南北方向に長軸線をとり、これに直交する東西線が最長となるよう南北線の中間に起点をとり、直交する東西線を定める。それぞれ幅2mをとってトレンチ発掘を進める。遺物は近世以降の土器・陶磁器片少量のみで表土から地山までは20~30cmといどであることが判明。馬塚の西から南にかけては、不幸にしてすでにブルドーザーによる削平が行なわれていたので、夕刻トレンチ西端と南端に Yunpoを入れ、土壤構造を見極め、ただちに地山層になることを確認。

トレンチ発掘に併行して馬塚の外形測量を実施。

8. 21 東西方方向の

トレンチを2

本追加。各ト

レンチ内で、

地山面に、き

わめて浅い段

状切込みや深

き数十cmの溝

状遺構も現わ



れはじめめる。出土遺物はやはり近世の土器片・陶片など。ロウ石製石筆も出土。

8. 22 トレンチ幅を1mに半減。南北トレンチと平行してその東側にさらにトレンチ設定。T-3西端すその地山面に数個の野面石が転落した状態で検出される。T-4の南端近くで、径約1mの円筒形ピット検出。明治初年の南方小学の便所跡と断定。

8. 23 トレンチ壁面の実測および平板による地形測量とを併行してとりくみ、トレンチの位置関係を入れる。その後、各トレンチ断面の写真撮影を完了する。

(文責・土井、角田)

## II 地理的歴史的環境

### 1 地理的環境

馬塚は、瀬戸町北東部、吉井川西岸の盆地状小平野の南縁、中央よりやや西寄りに位置する。標高91.6mのはぼ独立した小山塊である片山の、北西麓からやや離れ、少し盛り上がった独立の小丘である。

片山や、片山とともに馬塚池の谷をはさんで西方を北へ延びる舌状の新田山を北緯として、吉井川西岸に広がる東西約5.2km 南北約4.5kmの三谷山塊は、そのほとんどが粘板岩を中心とする非変成の上部古生層から成っているが、片山の東端や馬塚一帯だけは、吉井川東岸の広大な地域と同じく、中生代末ないし新生代初頭に噴出した流紋岩（石英粗面岩）である。<sup>(1)</sup>つまり馬塚は、局部的に流紋岩が露出したもので、南方はいったんわずかに低くなるが、すぐに古生層の片山へ連なり、西も浅い古生層の地山（水田や畑面直下）がやがて新田山となって高まっている。

馬塚の北から東にかけては瓜生川の東流する低湿地で、馬塚の頂部より4.5～5.5m低い水田となっている。このあたりの地山面はかなり深く、テストバイル打込み結果を見ても、表土から18～19m<sup>(2)</sup>も下である。ボーリング調査結果によれば、1～2mの表土・沖積土の下に7～19mの洪積土があって、粘土を主とし、シルトや砂を混ざるか、またはこれらをはさんでいる。地表下3m前後ではかなりの腐植をふくんでいるが、遺物の包含は見られない。

馬塚の北に広がる小平野の大部分には条里の跡が認められるから、7世紀後半にはこの一帯が耕地化されていたことがわかるが、馬塚のすぐ前面に東西に広がる弓形の土地は、古墳時代には馬塚周辺と北方の小平野とを分断する形で、低湿地ないし沼澤となっていたものと推定される。

（文責・角田）

注：(1) 光野・大森「岡山県地質図一昭38」によれば、このあたりは花崗岩となっているが、瀬戸中学校森淨郎の顕微鏡観察および注(2)の地質調査によれば流紋岩である。

(2) 中島地下工業株式会社「岡山アルミ缶工場新設に伴う地質調査一昭48」

## 2 歴史的環境

馬塚の北、吉井川の西に広がる旧万富町の小平野やその周辺に、いつの時代から人間の活動が見られるようになったか、確かなことはわからない。しかし、南方部落の南東のはずれや、千種山の北麓、宗堂部落内の小丘、あるいは坂根部落の春日神社が所在する小丘上などに、弥生式土器片の散布が見られるから、おおざっぱにいって2,000年近く前には、この地で人間の生活は始まっていたと考えられる。しかしそれは、はっきり住居跡とか墓とかの遺構が確認されたものではない。

古墳時代になると、いわゆる前期の古墳は確認されていないが、5世紀中葉以降と思われる古墳が分布している。南方部落の東に、北へ突出した尾根から山麓にかけて箱形石棺群、片山の頂上や尾根に箱形石棺5基以上と方墳（または方形台状墓か？）・円墳各1基新田山の尾根上に円墳8基以上、大井部落に円墳2基、塙納から山之池に通ずる隘路の北に横穴式石室1、宗堂の小丘上に円墳1基、前記春日神社の小丘に円墳1基等がこれまでに知られている。とくに片山古墳群のうち箱形石棺5基は、昭和46年12月から47年3月にかけて発掘調査されたものである。

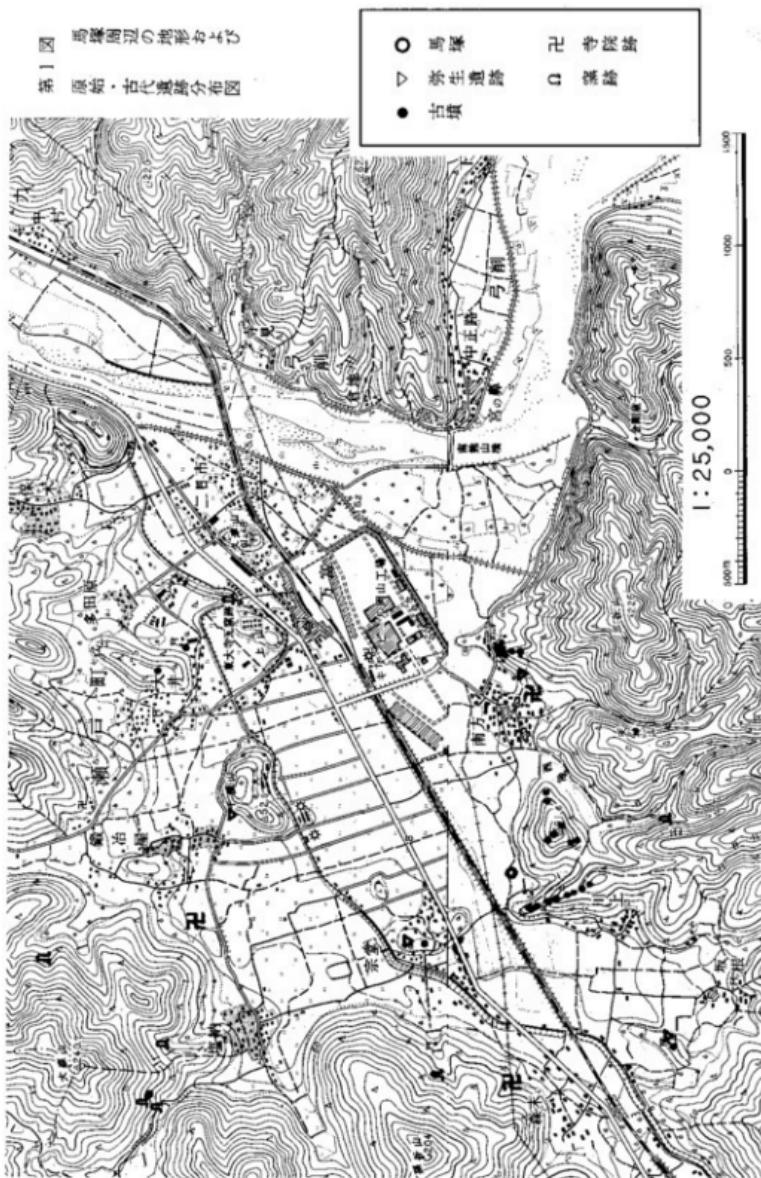
これら知られている古墳はすべて小規模なもので、副葬品等も豪華品の出土を聞かず、発掘した片山についても副葬品ゼロか刀子1口程度のものである。さらに、群としても一地域に数十も群集することなく、数基程度までの小群が点在するに過ぎない。

奈良以降になると、寺院跡として森末の妙興廃寺（軒平・軒丸瓦出土—奈良～平安）、塙納の吉岡廃寺（礎石と瓦片出土—奈良）、南方の五反田廃寺（軒平・軒丸瓦—奈良）、の三か寺を数えることができる。奈良時代から平安時代にかけて、この狭小な地域に三か寺が存在したことについては、生産や吉井川の水運などからの考察とともに、あるいは山陽道の変移といった視点も考慮してみる必要があるのではなかろうか。

平安末から鎌倉初頭を中心として、多くの窯が造られたのはこの地域の特色である。国の史跡に指定されている万富東大寺瓦窯跡をはじめ、宗堂ばかしょ、塙納勘定口・妙見堂・成の各古窯、鐵冶屋大谷、南方天神山古窯跡などで、多くは須恵器や瓦を焼いたものである。

中世以降この地 また、数多くの刀工を出したことでも著名であるが、これに伴うものかもっと古いものか、製鉄跡遺物のカナクソを出す谷も多い。（文賀・角田、土井）

第1図 馬塚周辺の地形図および  
原始・古代遺跡分布図



### III 調査の概要

#### 1 トレンチ

半月形の馬塚の長軸である南北方向と、これに直交して最長となるよう東西方向に、幅2mのトレンチを設定した。十字形のトレンチのうち、東のをT-1とし、北から西回わりにT-2、T-3、T-4とした。遺構が発見された場合に、直ちに4mのグリッド調査に切替えられるよう、T-1・T-3の北と南に8mの距離を隔て、幅1mのT-5・T-6およびT-7・T-8トレンチを追加、さらにT-1とT-8の間に、T-4から6m離して幅1mのトレンチT-9を入れた。

トレンチ内の土層層序は、上から耕作土、褐色土、地山（指頭大の流紋岩細礫と母岩）が基本で、部分的にはT-4のように、黄褐色土の薄い層を断続的にはさむもの、T-4、T-2のように、褐色土層の上に淡褐色土層をはさむもの等が見られる。

T-2を除く各トレンチに溝状遺構、またはピットが検出された。溝は、耕作土から地山まで掘込まれたものと、地山層に浅く掘られたものとに分かれるが、トレンチ発掘であるため、長く延びる本来の溝であるのか、細長いピットであるのか確認していない。いずれにしても、すべて原始・古代のなんらかの遺構と推定されるものはなかった。ピットまたは溝状遺構のうち、新しい時代の肥料穴と推定できるものがかなりあった。T-4の南端近くで、径約1mの円筒状ピットが検出されたが、底部近くには薄い松板が、掘り方にそってめぐらされていた。古老の談では、明治初年の南方小学の便所がこの付近にあったということ、その遺構と断定された。

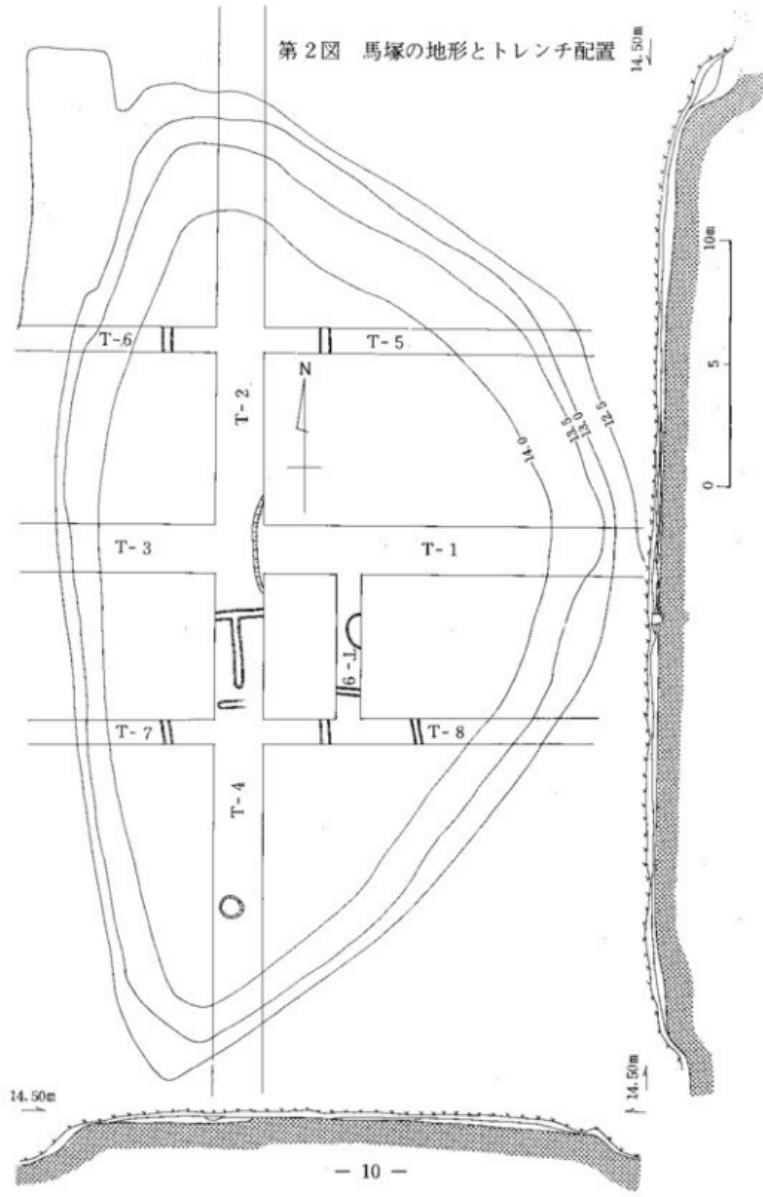
（文責・角田）

#### 2 トレンチ内の遺物

馬塚上の土は、畑作のために周辺から運んだ盛り土であるが、盛り上げるときに耕作を始めてのうちにか、かなり攪乱されていて、有釉陶磁器片や板ガラス片、目薬瓶などが、ときには地山直上からも出土した。T-1、T-4では、ロウ石製石筆の磨耗あるいは切損したものや、粘板岩製石板の小片なども発見されたが、南方小学当時の遺物であろう。

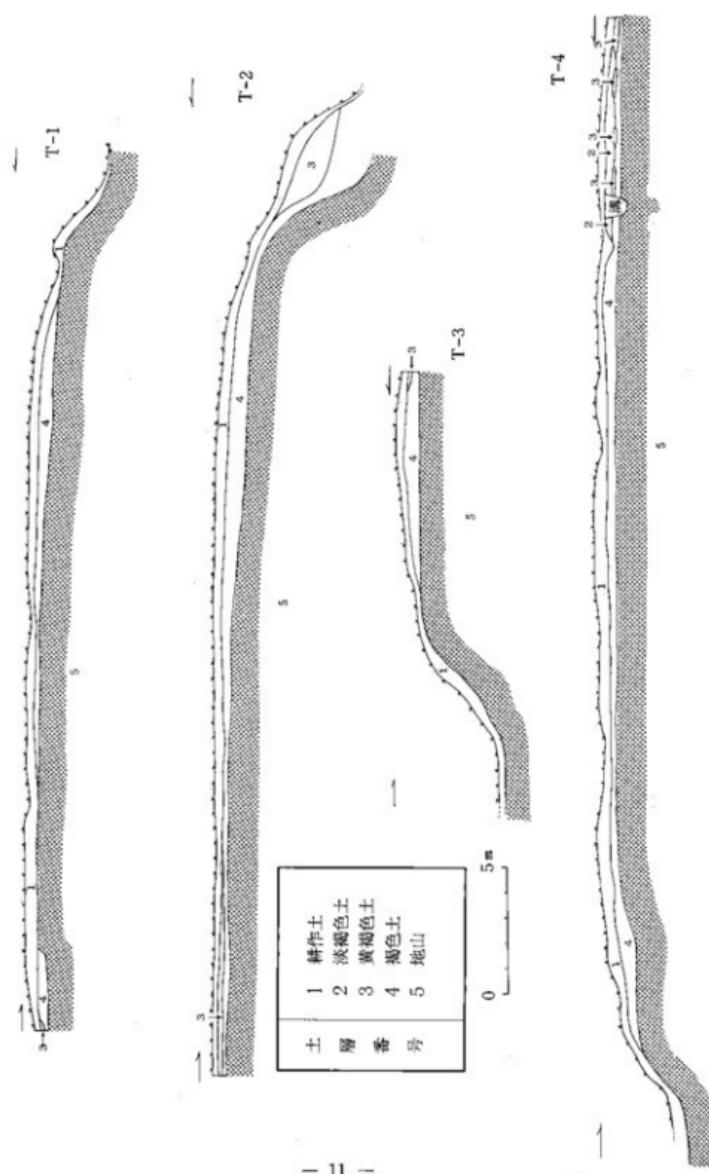
T-7で検出された溝状遺構を追求するため、溝の延びる方向へ幅1mでトレンチを入

第2図 馬塚の地形とトレンチ配置

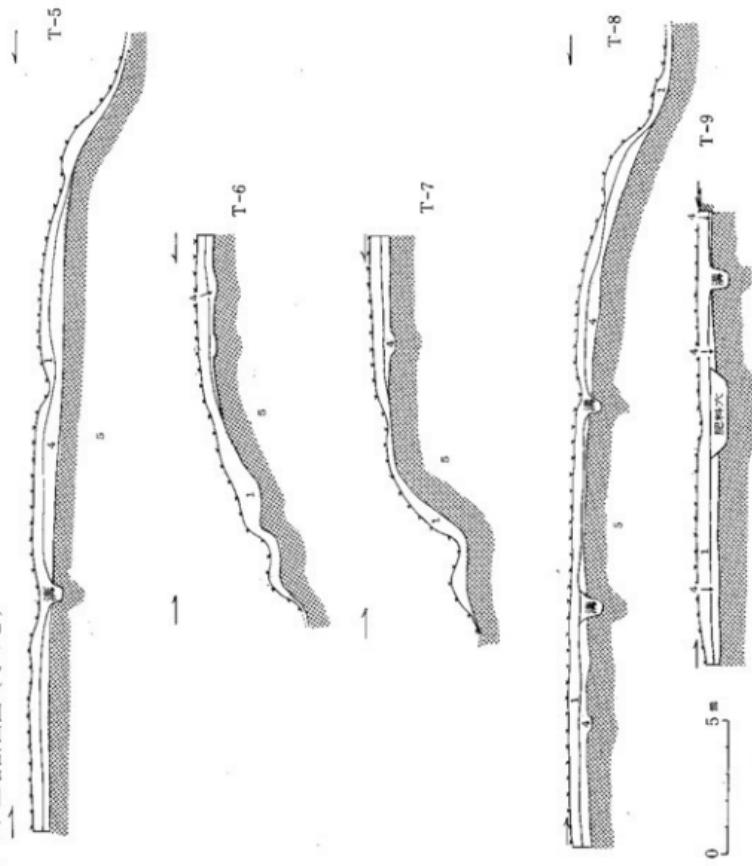


第3図 トレンチ土層断面図（その1）

※ レベル高はすべて14.50m



第4図 トレンチ土層断面図（その2）



れたとき、溝のすぐ外側の地山上で、室町時代末以降と思われる有釉陶器片(挿図5-14)が発見された。またT-2からは須恵質の壺の口縁部小片が出土したが、本米馬塚上に存在していたものとは考えがたい。

(文責・土井、角田)

### 3 馬塚周辺採集の遺物

発掘着手の段階では、すでに周囲の水田は地表面まで削平されていたが、ブルドーザーが押し動かした土の上に、点々と土器が散布していた。すべて馬塚の西側、新田山や馬塚池の方向から押された埋土中より採集できるものである。トレンチ調査の結果、トレンチ内で出土した土器片等は、ほとんど圓化に耐えないものであるが、周辺部で採集した遺物は挿図5に示すとおりである。平安時代末と思われるツボ、鉢、壺等の須恵器片、上鍋の脚3片、鎌倉末および室町時代と思われる備前焼スリバチ片各1、龜山焼片等である。

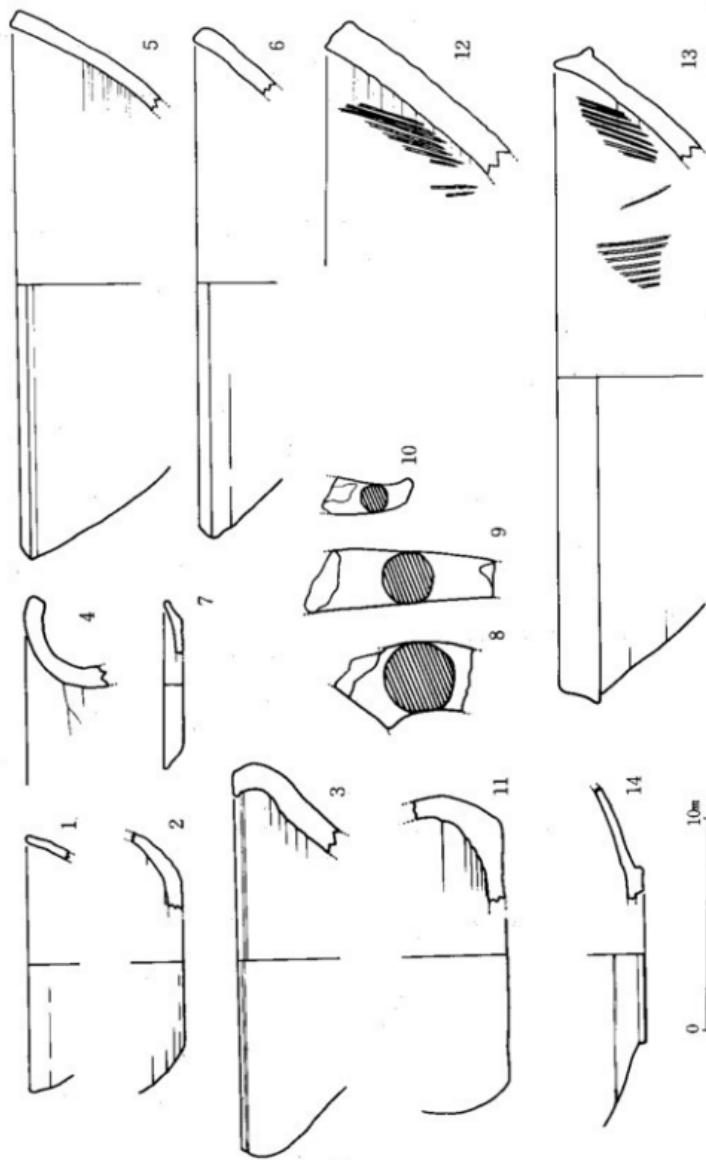
(文責・土井、角田)

## IV まとめにかえて

以上の事実から、馬塚全体を古墳ということはできないし、この小丘上に何基かの古墳が存在した痕跡もまた認められなかった。「馬塚について」の項で、荒木誠一の計測値と調査団の計測値がかなりくい違っていることを指摘したが、おそらく明治20年には馬塚は半月形の堀になっていたのであるから、荒木の調査した大正年間に彼のいう計測値の古墳が存在したとは考えがたい。確実といえるのは明治初年の南方小学の存在のみである。

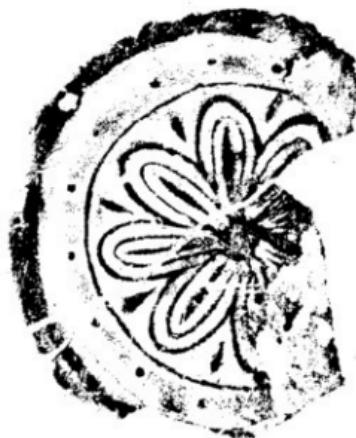
しかし、新田山東斜面で過去に須恵器片を採集していること、新田山と片山の尾根上に小古墳が存在すること、とくに新田山の山上でも須恵器片を採集していることなどから考えて、馬塚池の谷一帯には、これらの古墳に関連のあるなんらかの遺構(例えば住居跡)が考えられるのではないか。この一帯は発掘その他精密な調査が行なわれないまま、すでに埋立てられ、あるいは削平された所が多く、古墳群を作った人々の性格を明らかにする機会を失ったことが惜しまれる。

第5図 馬場周辺およびトレンチ内採取の遺物





1



2



3

第6図 周辺寺院跡出土瓦拓影  
1：五反田廃寺 2・3：妙興廃寺

0 10cm

第7図 馬塚周辺の地割図

\* 数字は番地



古墳時代のみならず、奈良、平安以降についても、なんらかの手がかりがつかめたかも知れないのである。

さて、こうしてここに発掘調査と調査報告書の作成を終わるのであるが、以上のように馬塚自体を古墳と断定することもできなかったし、馬塚上に古墳が存在したかもしれない痕跡を確認することもできなかった。しかし、いわゆる開発によって、過去無数の遺跡が消滅させられ、あるいは「記録保存」と称して現実的に遺跡が消滅させられつつある例は枚挙にいとまがない。ひとたび失なわれた遺跡は絶対に再現できないものであるから、「調査の発端」の項で掲げたような確約書が出されたにせよ、とくにその第4項を空文化せしめないよう、文化財保存の意義にかんがみ、充分な措置を要望したい。ことに市町村の文化財保護行政について、格段の決意と施策を期待してやまない。

(文責・角田)



(1) 馬塚遠景（北から）



(2) 馬塚遠景（南西から）

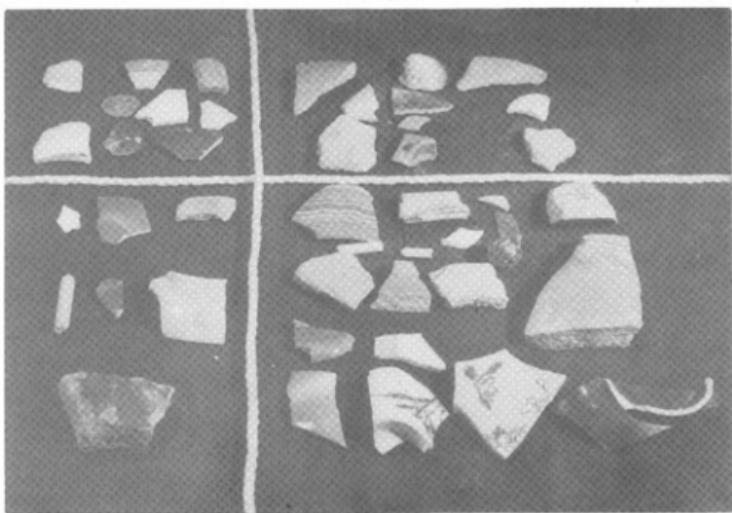
図版第 2



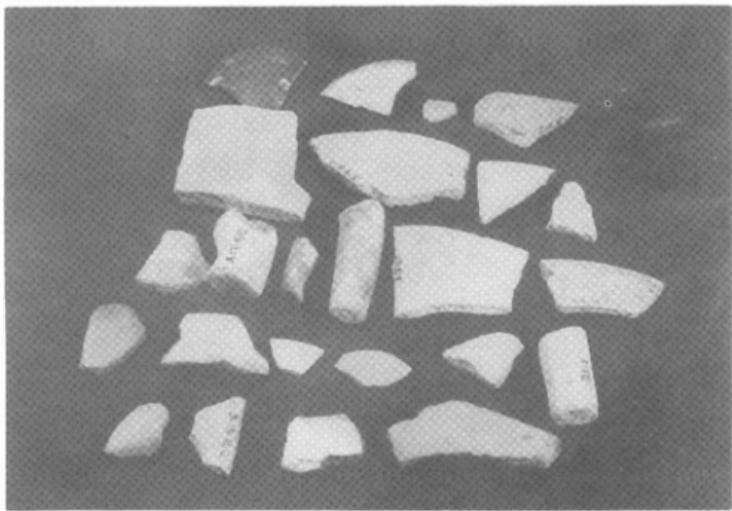
(1) T-3断面（東から）



(2) T-2断面（東から）



(1) トレンチ出土遺物



(2) 周辺採集遺物

图版第 4



(1) 五反田庵寺出土軒平瓦



(2) 妙興庵寺出土瓦

馬塚「古墳」調査報告

昭和49年10月31日発行

発行 濑戸町教育委員会  
岡山県赤磐郡瀬戸町瀬戸

印刷 錦瀬戸合同印刷所  
岡山県赤磐郡瀬戸町下